深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **作者は、どのような思いから旅に出ようとしているのか、考えてみよう。**

【答】 白河の関などの奥州の名所旧跡に対する関心が昂じて、特に理由もなく、何かに取りつかれたように旅に出て漂泊したいという思い。

▼ポイント▲ 「そぞろ神の…手につかず」という表現の説明を端的に行えるかどうかがこの設問の眼目である。「物につきて心を狂はせ」「招きにあひて取るもの手につかず」という表現から、あてのない旅への憧憬を読み取ることができればよかろう。また、「白河の関」「松島の月」といった奥州の歌枕に対する関心が、旅立ちへの契機となっていることも併せて指摘したい。

言葉と表現の解答例

1 **本文中から、対句表現を探してみよう。**

【答】 ①「月日は百代の過客にして」（一〇〇・2）と「行きかふ年もまた旅人なり」（一〇〇・2）。②「舟の上に生涯を浮かべ」（一〇〇・2）と「馬の口とらへて老いを迎ふる」（一〇〇・3）。③「そぞろ神の物につきて心を狂はせ」（一〇〇・6）と「道祖神の招きにあひて取るもの手につかず」（一〇〇・7）。④「股引の破れをつづり」（一〇〇・7）と「笠の緒付け替へて」（一〇〇・7）。

▼ポイント▲ それぞれの語句がどのように対応するか、注意したい。対句表現の多用によって、リズミカルな文体になっている。

2 **次の傍線部の後にはどのような表現が省略されているか、考えてみよう。**

(1) **またいつかはと心細し。（一〇一・2）**

(2) **後ろ影の見ゆるまではと（一〇一・6〜7）**

【答】 (1)（上野、谷中の桜を）見ることができるだろうか。

(2)（作者たちを）見送ろう。

▼ポイント▲ 直前までの文脈を踏まえて、省略されている表現を読み取ることができるかどうかを試している。(1)は旅立ちの時を迎えた作者の様子が描かれており、「上野、谷中の花の梢」とあることから、解答を想起したい。(2)はいよいよ出発に際して、人々が作者の進む道に「立ち並びて」いる様子が描かれ、別れを惜しんでいる様子が描かれていることを理解させたい。

言語活動の解答例

1 **「古人も多く旅に死せるあり。」（一〇〇・3～4）とあるが、作者のどのような心情が込められているか、話し合ってみよう。**

【答】（意図）「古人も…」の箇所が、作者が旅に出る大きな動機になっていることを読み取らせたい。これまでにも多くの文人達が、旅を通じて優れた作品を残してきたことに言及し、作者自身もその系譜に連なろうとする思いが込められている点を読み取りたい。

（手順）

1　作者が長い旅路の出発に際して、わざわざ「古人」の先例を取り上げる必要があるのか、そこに作者のどのような気持ちが込められているのか、生徒達に問題提起する。

2　「古人」の例とされている人々が優れた作品を残した文人達であることを、脚注を参照しながら確認する。

3　生徒達の意見をまとめる。「先人達と同様に、自分も優れた作品を残したい」という気概を読み取るような意見が出ることが想定される。それに加えて、優れた文人達の系譜に自分も連なろうとする意識を作者が持っている点にも気づかせたい。生徒達から意見が出なかった場合には、教員がその点を指摘してもよい。

4　「過去の先人達を超えるような個性的な作品を残そうとするのではなく、過去の先人に連なるということにどのような意味があるのか、考えてみよう」と再度問題提起をし、生徒達の考えをまとめる。

（ゴール）「旅に生きた昔の文学者への憧れの気持ち」や、「古人たちと同じく、旅に生き、優れた作品を残したいという心情」などが読み取れることを、話し合いの中から発見させたい。また、作者が「先人達を超える個性的な作品を残したいという意識」ではなく、「先人達の系譜に連なろうとする意識」を持っていることに着目し、生徒達が現代とは異なる価値観について考えを深める機会にしたい。

（小林　俊洋）